

第 7 9 回 近畿地区大学建築系学科
卒業設計コンクール応募作品一覧

2025年4月11日 日本建築学会近畿支部

No.	作 品 名	学生氏名	大 学 ・ 学 科	図面枚数
1	三本足の椅子	荒木 玲乃	京都精華大学 デザイン学部建築学科	20
2	災害公営住宅としての恒久的な公的賃貸住宅の活用-空室・空き家問題を抱える地域社会を巻き込んだ災害時の迅速で快適な居住環境の提案	伊藤 つばめ	大阪電気通信大学 建築学科	4
3	たたら 鐵の里～島根県雲南市吉田町の「たたら」を紡ぐ文化館～	伊藤 凜	武庫川女子大学 建築学部景観建築学科	8
4	漕ぎつなぐ琵琶湖のミチ	井上 陽平	京都大学 工学部建築学科	21
5	漸次的プロセスとしての建築-京都駅プラットホームをモデルケースとして-	植木 慧	京都府立大学 生命環境学部環境デザイン学科	9
6	知能の拡張 生成AIによってアンビルトを再構築する設計プロセスの提案	上村 和輝	京都工芸繊維大学 工芸科学部デザイン建築学課程	20
7	てだこ浦添街道計画：琉球くらしを発信する観光施設	大西 杏奈	大和大学 理工学部理工学科	16
8	暮らしが根づく庭	大町 有香子	京都工芸繊維大学 工芸科学部デザイン建築学課程	9
9	紡ぐ-まちまるごと学校計画-	岡 結彩	関西学院大学 建築学部建築学科	14
10	「脈」の再生	小川 千智	奈良女子大学 住環境学科	20
11	海とともに暮らす-高知県黒潮町における事前復興まちづくり計画-	唐岩 愛	神戸芸術工科大学 環境デザイン学科	12
12	シオの追憶-広島県竹原市の記憶を運ぶソルトシップ-	河内 遼	立命館大学 理工学部建築都市デザイン学科	20
13	宍粟の環-福祉サービスと共存する地域コミュニティ施設の提案-	岸本 麻由	兵庫県立大学 環境人間学科	6
14	風景に住まう～棚田に没入する暮らし～	小森 魁	京都美術工芸大学 建築学科	15
15	生き物の「住」-居場所とはどういうものなのかを考えるための施設-	小山 遥加	武庫川女子大学 生活環境学科	17
16	醸すを継ぐ-奈良・三輪山麓における日本酒醸造拠点-	芝崎 琉	神戸大学 工学部建築学科建築デザインコース	5
17	都市、私の家、アンビバレンス。-木造密集地域におけるみち空間の漸進的な反転による界限性の回復-	大道 菜々花	近畿大学 建築学科	22
18	造景対衡-阿蘇の自然景観と建築の対立による調和-	高島 佳乃子	武庫川女子大学 建築学部建築学科	16
19	Chalin's House Project	田中 芳明	成安造形大学 芸術学部芸術学科	10
20	私「から」あなた「まで」～関わり合う距離感のアーカイブ～	谷 郁人	大阪工業大学 ロボティクス&デザイン工学部空間デザイン学科	16
21	未来の海へ続く道-人々の意識を変える海洋ごみの回収拠点-	内藤 海斗	京都橘大学 工学部建築デザイン学科	4
22	Abese 地区再編計画-私が感じた美しい暮らし-	中尾 雅	大阪大学 工学部地球総合工学科	21
23	音楽の空間的翻訳-天理市における音楽ホールを中心とした音楽複合施設の設計提案-	中西 朱音	帝塚山大学 現代生活学部居住空間デザイン学科	8
24	カコミニワ+	野崎 愛葉	京都女子大学 家政学部生活造形学科	4
25	都市の剥離流を活用した商業風力発電の試み-CFD解析による剥離流の加速と快適風速への減速-	濱口 司	大阪産業大学 デザイン工学部建築・環境デザイン学科	9
26	石積み再生集落 奈良県川上村白屋地区における石積みを活用した集落の再生	藤井 志月	京都芸術大学 芸術学部・環境デザイン学科	17
27	線になる拠り所-熊野古道伊勢路巡礼の再興-	水本 貴子	関西大学 環境都市工学部	20
28	つむぐ記憶、ほどく日常	光野 綾華	大阪工業大学 建築学科	19
29	家環 住宅の長寿命化のための循環型住み替え	望月 里益	大阪公立大学 生活科学部	10
30	風景を愛するために	森川 量平	摂南大学 理工学部住環境デザイン学科	4
31	うつろう集落 急傾斜地に位置する漁業集落の人口減少に応じた集落縮小に関する研究と提案-雑賀崎を事例として-	大和 玖龍	和歌山大学 システム工学部システム工学科	8
32	飯岡クロノフィールドミュージアム	吉川 日々輝	神戸大学 工学部建築学科都市デザインコース	20
33	みくまりの民の営み 助け合いの風景を育む建築的インフラの提案	渡邊 光輝	摂南大学 理工学部建築学科	8

(五十音順) 以上33点<No. 欄に○印のものは入選作品>

日本建築学会近畿支部
令和6年度近畿地区大学建築系学科
卒業設計コンクール（第79回）審査報告

審査員長 梅田善愛

2025 年 4 月 11 日（金） 審査会場：Web 会議システムを利用

審査員長（互選） 梅田善愛
審査員（50 音順） 臼井明夫、岡 隆裕、岡村吉展、久保 岳、平岡公章、安岡寛治
応募作品 33 点（別紙参照）

審査経緯

第 79 回審査会は、第 74 回から続く WEB 開催となり、設計事務所及びゼネコン設計部所属の実務経験豊かな 7 名により審査が行われた。作品データは事前に各審査員に送られ、各々で丹念な読み込みと評価を行った上で審査会に臨み、的を絞った議論を行うことで審査会はスムーズに進行した。

応募 33 作品はいずれも力のこもった作品であり、学生それぞれが課題意識を持ち、背景にある社会問題や場所が抱える問題を掘り下げ、解決するための手立てを懸命に探った痕跡が感じられ、どの作品も見応えがあった。

第 1 次審査では 33 作品に対し、各審査員が 1 作品に対し 1 票ずつ、6 票を上限に投票を行った。投票結果は、6 票 1 作品、5 票 1 作品、4 票 2 作品、3 票 4 作品、2 票 2 作品、1 票 7 作品となり、この時点で得票の無かった 16 作品は選外とした。得票数 1 票の 7 作品について、各審査員から票を投じた作品について解説を行い、意見交換をしたうえで第 2 次審査へ進んだ。

第 2 次審査では 17 作品に対し各自 4 票の投票を行い、6 票 2 作品、5 票 1 作品、3 票 2 作品、1 票 5 作品の結果を得た。この時点で得票のあった 10 作品の全てについて改めて内容の確認と議論を行い、10 作品すべてを対象に第 3 次審査を行うこととした。

第 3 次審査では各自 2 票の投票を行い、5 票 1 作品、3 票 1 作品、2 票 3 作品の結果を得た。得票のあった 5 作品のうち、5 票を得た作品は課題設定、課題解決、デザイン、プレゼンテーション全てがストーリー化され見るものを納得させる力を持ち、第 1 次審査より高得票を得ていた。この時点で審査員全員合意の上、この作品を入選とした。残る 4 作品は第 2 次審査より接戦を続けており、議論によっても評価を決することが難しく、この 4 作品について第 4 次審査を行うこととした。第 4 次審査では 1 人 1 票を投じ、3 票 1 作品、2 票 1 作品、1 票 2 作品の結果となり、審査員全員合意の上で、3 票及び 2 票を獲得した作品を入選とした。第 3 次審査で得票のあった 5 作品は、いずれも力のこもった魅力ある作品であり、その中から 3 作品を選び取るのは非常に心苦しい思いであった。

最後に、学生たちとの対話を通して、社会との関りや建築の持つ力について多くの議論やアドバイスを行われたであろう各大学の先生方の努力に、心からの敬意を表したいと思う。

（梅田）

審査概要

今年の大学卒業設計は、時代のトレンドや独自の問題意識からテーマを設定した 33 作品が、昨年に続きリモートで審査された。各大学を代表する魅力的な作品は、審査員が事前に読み込んだうえで、審査会において活発な議論を進めていく中で、新たな魅力や評価が見い出された。

作品の特徴として、今年も調査、分析やダイアグラム等でのコンセプト説明に比重が置かれた作品が多い印象だったが、一方で、力強い造形や自己表現の光る作品もあった。審査は、テーマの設定と、提案を行うプロセス、設定したロケーションとの親和性やそれらを説得する表現力と造形力が、作品として光るモノとなっているかどうかを読み解き、審査員が互いに議論し、入選作品の選定を行っていった。いくつかの作品は、設定したコンセプトを説明しきれないまま未消化のプレゼンとなっているモノもあった。

その中で入選した 3 作品は、表現力、造形力、創造力が際立った作品であり、建築の力を感じさせる作品が選ばれた。惜しくも選外となった作品についても、3 作品を選定するまでに 4 回の投票と議論を重ねなければならぬほど、評価の高い作品が多かったことを付け加える。

(平岡)

入選作品（3 作品）選評

(五十音順)

漕ぎつなぐ琵琶湖のミチ

井上 陽平君（京都大学）

大学ボート部の 130 年の歴史ある「琵琶湖周航」。手漕ぎボートで琵琶湖を一周する伝統行事を未来につなぐための、湖岸 7 か所に点在する艇庫の設計である。琵琶湖岸の持つ風景や、場を象徴する素材、水面との断面的つながりをテーマに、湖と街の境界で、艇庫が単一用途を超えた魅力的な建築群として展開している。

線画と点描のドローイング、緻密な断面図、リアリスティックな群像模型が、繊細な木組み架構と呼応するボートから突き出した 12 本の樫、琵琶湖岸の風土にあった葦・竹・トタンの素材や石垣・水面の扱いに表現として良く馴染む。おそらく実体験の延長であろう繊細な設計が、熱意と共に現実にアンカーされた建築として丁寧にデザインされている。湖上での 6 人の漕ぎ手の息遣いすら感じさせる随筆文学のようでもありながら、不思議な地域社会性と土着的なリアリティのある、骨太で独特の世界観を持つ作品であった。

(岡)

シオの追憶ー広島県竹原市の記憶を運ぶソルトシップー

河内 遼君（立命館大学）

安芸の小京都と呼ばれ、かつては製塩や酒造で栄えた商家が軒を連ねた町・竹原。この作品ではかつての賑わいが失われた竹原の“いま”を背景に現代社会の“食”を課題として捉え、JR 竹原駅周辺の再生が提案されている。作品前半ではまちの歴史や文化と課題とが丁寧に紐解かれ、地域を題材に読まれた和歌の分析から建築空間にシーン展開させ、時間をこえ記憶を紡ぐストーリーなど興味深い。後半の設計提案では、駅南側に広がる塩田跡埋立地を入江として再生させ、そこに建築を絡ませ配置しデザインする計画全体の構成力には巧みさを感じる。反面、審査会では建築として平面機能や全体構成が少しわかりにくいといった点について意見が交わされた。最終的には構築されたストーリー性やプレゼンテーションの力強さとともに、この建築（ソルトシップ）が駅周辺未利用地という点の再生に留まらず、この場所を基点にまちを巡り・記憶や賑わいを紡ぐことで竹原全体の活性化を予感させる点など、卒業設計として意欲的であり完成度が高い点が評価のポイントとなった。

（安岡）

都市、私の家、アンビバレンス。ー木造密集地域におけるみち空間の漸進的な反転による界限性の回復ー

大道 菜々花君（近畿大学）

生野区の木造密集地域において、みちとそれに面する長屋の増改築によって界限性を回復しようという計画。

プレゼンテーションは独特で、美しいドローイングと共に主観的な体験をベースとした文章が展開されている。

計画内容を説明する図面や文章の難解さから、この案を支持するか審査の中でも議論があった。しかし、学生の設計課題という、多くの場合アンビルドを前提とした設計行為で、かつ、内在する建築的な野心の拡張をひとつの目標とした設計協議においては、応募資料そのものも自己表現の場=作品として評価すべきとの意見があった。作品には美しいグラフィックに加え、「わたしとし」といったキーワードや超主観的な詩的な文章、さらには詩そのものが散りばめられている。時には言葉が図や絵よりも多くの人を動かし、街を変えるきっかけになるのではないかと考えさせられた。作者に内在するエネルギーや将来の可能性、期待感を感じ、この作品を推すこととなった。

（岡村）